

ドイツにおける団地の暮らしと住まいの日常

—住まいの内側と外側—

HOKKYO Hakaru
法橋 量

はじめに——高層集合住宅の日常

民俗学が同時代の日常文化を対象とする学であるとするならば、住まうこと、暮し方はその最大の関心事であるはずである。ところが<住む>あるいは<暮す>という概念は、曖昧である以上に極めて包括的であるがゆえに、この概念が覆っている日常の領域は余りにも広く、民俗学者は概して住むことの物質的側面からこの生活領域にアプローチしてきたと言えるだろう。

2014年に日本民俗学会の主催による国際シンポジウム『『当り前』を問う！—日中韓による高層集合住宅の暮らし方とその生活世界』において、<高層集合住宅>という西欧近代に発祥し今やグローバルに共有され<住まいの標準>ともいえる住まいの形式が議論の出発点に選ばれたのは、異なる社会における、それぞれの‘当り前’ = ‘日常’を問い、さらには民俗学の方法を問うためであった [岩本 2014: 1]。

本論では、このシンポジウムの議論を参照しつつ、現代のドイツにおいて高層集合住宅あるいは住宅団地が<住まう>ことの日常においていかなる意味を持ち、またそうした日常を捉えるためにいかなる方法が用いられてきたのかを見てゆく。その際に、住まいの日常を、生活を営む空間としての住居の内側、一方で住居を外側から取り囲み日常を形作るコミュニティの中の住まいという、二つの側面から見てゆきたい。

1. 団地の日常——ヴァインガルテンの暮らし

はじめに筆者が、ドイツ・フライブルク市郊外の高層集合団地で、1997年から1998年までの1年間住んだ賃貸住宅での個人的体験から話を始めたい。

ドイツ南西部、フライブルク市中心部から西に2kmほど離れた郊外に、大型集合団地ヴァインガルテン (Weingarten) 地区がある。22階建のいわゆる高層住宅 (Hochhäuser) を含むヴァインガルテンには現在およそ2,000戸の家族向け住宅に、約11,000人程度の住民が暮している市内最大の市街区である [Amt für Bürgerservice und Informationsverarbeitung der Stadt Freiburg im Breisgau 2014: 19]。22階建て高層住宅を含むこの団地は、市中心部の人口増大に対処すべく1964年に着工、1974年に整備が完了した、当時としては近代的な新しい町の誕生であった。ところがフライブルク市ではほぼ同時期にビショッフスリンデ (Bischofslinde)、ラントヴァッサー (Landwasser) など次々と新しい団地が生まれていたのだが、なかでもヴァインガルテン地区は、現在でもコミュニティとしては芳しくない<レトルト> [Scherfling 1994: 61]、<社会的ホットスポット> [Huber-Sheik 1996] <フライブルク>

クのプロングス > [<http://www.newsplay.de/video/badische-zeitung/Baden-Wuerttemberg/Vermischtes/video-Umfrage-Was-verbindet-ihr-mit-Weingarten-Freiburg-Assoziation-Stadtteil-Image-417515.html>] (2016.2.18 アクセス) といったレッテルを貼られている。「ヴァインガルテンで歩く時は財布に注意しろ」であるとか、「フライブルクの市街区中、最低のステータス」というような評判もしばしば耳にするような、そんな町であった。

ヴァインガルテンは、市中心部から西へ延びるオプフィンガー通り（Opfinger Straße）に面した 22 階の高層住宅を含め、8 階建ての家族向け賃貸住宅、二世帯住宅等から成り立っている。住居建築自体は高さ、大きさ等単調さを避け、住居棟の間には十分に広い緑地を置いて密集を防ぎ、さらに街区の北側には広大な敷地面積をもつディーテンバッハ公園（Dietenbachpark）、小川も流れ、環境的配慮も充分なされている。

市街区区内には、教会、小中学校等の公共施設も整備されている。さらに町の東側・西側には、病院、パン屋、飲食店、書店等の店舗、ドラッグストア、スーパーマーケットを具えたショッピングセンター等の商業施設も一通りそろっており¹、住民は日常的な消費生活に不自由することはない。このショッピングセンター前の広場では毎週水曜日・土曜日に市が開かれ、近郊の農家からの野菜や肉などの生鮮食品、パン屋、チーズ等の店舗が出店し新鮮な食料品等を提供している。

また住民が通勤、さらには地元で入手し難い商品の買い出し等に利用する公共交通は、地区を東西に 1994 年に開通した市電が貫いており、南側にはバス路線が走っており、およそ 15 分程度で市中心部にアクセスできる。

それでは、この団地内での住居はどのようなものなのだろうか。ここでは筆者が住んだ地区の一番西側に位置する典型的な団地棟の内部を見てみよう。1968 年に施工されたこの建物は、8 階建、176 戸の家族向け分譲住宅に区分されている。その中で筆者が 1997 年から 1 年間居住したのは典型的な家族向け < 2 部屋 + キッチン + バスルーム > である（図 1）。



図1 ヴァインガルテンの典型的な2部屋住居の間取り
(holz不動産のチラシより：www.holz-immobilien.de 2016.2.18アクセス)

日本で言えば、床面積は 50㎡のバルコニー付き 1LDK、加えて地下に 1戸に 1室倉庫が与えられている。屋内は、リビングルーム (Wohnzimmer) と寝室、キッチンとトイレを備えたバスルーム、物置 (Abstellungskammer) (図 1)。この物件は、市外在住の所有者からの賃貸契約であったが、家具、キッチン用品などは予め備えられている。まずリビングには 4人掛けのダイニングテーブル、ソファ、リビングテーブル、食器等を収めるキャビネットボード、窓際に書き物机、タイル張りの床にはカーペットが敷かれている。壁面には複製絵画の額。テレビ、ラジオ付きカセットデッキが備えられている。隣の寝室にはダブルベッドと大型の衣装ダンス。やはり床にはカーペット。このほかキッチンは調理器具として備えつけの電気コンロ、電気オープン、その他鍋やフライパン等キッチン用具一式。電気掃除機。

また暖房施設はセントラルヒーティング式のスチーム暖房器が、リビング、寝室、バスルームに備えつけられている。洗濯機については、室内には常備されておらず、建物最上階に洗濯室 (コインランドリー) があり、6 台の乾燥機付き洗濯機が設置され、毎週 1 回、常駐管理人 (ハウスマイスター) から専用コインを買い取り、予約をして使用する (コイン 1 枚でほぼ 1 回分)。こうした家具・備品類は、通常の生活を送る上で、特に短期滞在家族向けの最小限度の必要を満たしている。

ドイツにおける住宅の一人当たりの平均床面積が 1990 年代には 35㎡あったことを考慮すれば (2010 年には 43㎡に増大している [Hart & Scheller 2012 : 51])、決してスペースに余裕がある物件とは言えないが、少なくとも食事をとる、睡眠をとる、休息する、家族とコミュニケーションをとる、そうした基本的な日常生活を送る空間として、ヴァインガルテンのこの住宅は十分な機能を有している。ただし大型集合団地の一般的特徴として、同フロアの住民同士のコミュニケーション、近隣の付き合いが活発ではない面はある。しかし生活を営む上で障害となるほどではない。また 40 年以上も前に建設された建物も目に見える老朽化や損耗は顕在化していない。

2. 内側の日常と外側の日常

ならばこのヴァインガルテン地区は (図 2)、なぜ問題のある地区と呼ばれているのだろうか。その理由は、住宅建築や都市計画そのものに問題があるというより、この地区に暮らす住民の社会構成にある。先にも触れたように、ヴァインガルテンは、市中心部から膨張した人口の受け皿として、フライブルク団地公社 (現在のフライブルク市建設公社) がいわゆる社会住宅 (Soziale Wohnung)² として建設したものである。より安価な賃料で幅広い階層に住居を提供することが本来この市街区に求められていた。したがって初期の入居者には、生活扶助受給者や一人親家庭、外国人、シンティ (Sinti) (ジプシー) も多く含まれていた。さらに 1990 年代に入るといわゆるアウスジートラー (Aussiedler) と呼ばれるロシア、東方からの旧植民者が故郷を離れ転入し、またバルカン紛争により旧ユーゴスラビア連邦からの難民の受け入れ先にもなり、非ドイツ系住民の比率は増大していった。2000 年代に入ると移民の占める割合は 50%前後を推移する状況になっている。また、失業者の比率も、20%強で推移し、これはフライブルク市全体の失業率が 10%弱であるのに対しても顕著である。さらに近年では 65

歳以上の高齢者の比率も 20%強と、市全体と比較して高齢化が進んでいると言える [Forum Weingarten 2015:4-8]。

こうした 60 カ国以上の国籍の住民が共生し [Scherfling 1994 : 62]、また社会的弱者の比率も市全体と比しても高いこの市街区の特殊な地域性が、ネガティブ・イメージを醸成する温床になっているのである。事実、町中でエスニック・グループごとにたむろする若者達の姿や公共マナーの悪さ等、取り沙汰されるケースは少なくない。新たに造成された町である高層集合住宅団地であり、様々な国籍を持つ移民集団や社会的弱者を受け容れる社会都市 (Soziale Stadt)³ であることが、まさに<レトルト>、<フライブルクのブロンクス>と揶揄される所以となっているのである。

もっとも多様な住民層を含んでいるヴァインガルテン地区であるが、コミュニティとしての活動がないわけではない。カトリック系の聖アンドレアス教会教区、プロテスタント系ディートリヒ・ボンヘッファー教区 (Dietrich Bonheffer Gemeinde) などの宗教的つながりから、各種スポーツクラブ、園芸同好会、写真同好会など趣味のサークル、またファスネット (カーニバル) グループなど伝統的まつりに参加する教会組織も存在する [Bürgerverein Freiburg 1978]。住民達のこうしたアソシエーションと共に、市民協会のような自治会組織、フォーラム 2000 (1985 年設立、現在 Forum Weingarten に改称) といったソーシャルワーカーの NPO も存在し、町づくりのイニシアティブをとっているほか、聖ニクラウスなどの伝統行事や市民祭などを主催し、コミュニティの連帯を促す活動を積極的に行っている。こうした、ヴァインガルテンのいわば公共的な日常の営みに焦点を当てれば、それは住まいの複合体であるコミュニティ研究の領域となる。さらに言い方を換えれば、そうした領域は、外側の住まいの日常研究である。

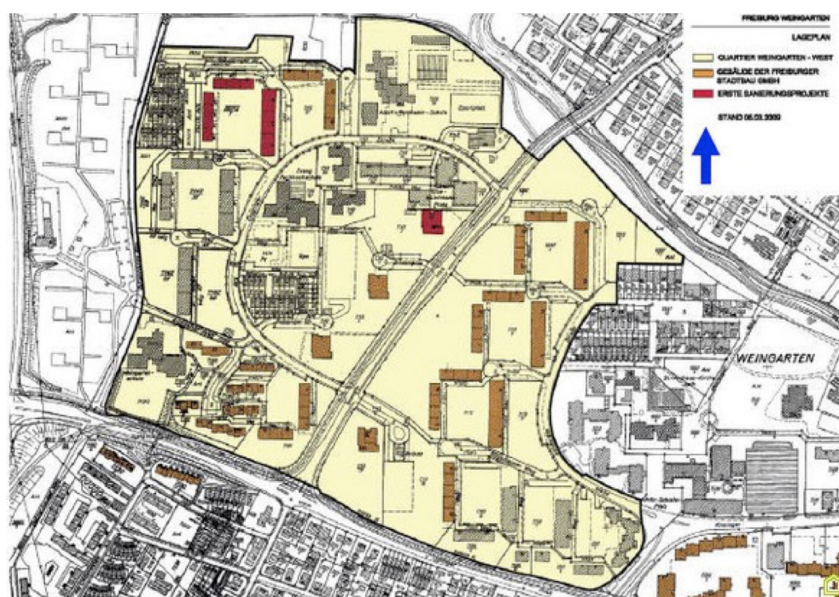


図2 ヴァインガルテン地区都市計画図 (薄い網掛け部分が西地区)

(<http://www.eneff-stadt.info/en/slideshow/bilder/model-city-district-refurbishment-weingarten-west-freiburg/weingarten02-site-plan//projekte/> 2016.2.18アクセス)

一方で、このように様々な社会階層、国籍、年齢、家族構成を含むヴァインガルテンという町での生活が、例えば先に記述した1LDKの住居の中で営まれている。望む望まないにかかわらず、団地建築としてモジュラー化された居住空間で生活しなければならない。〈住まう〉という、なかば私的領域に属する日常を問うことは、これら多様な出自、文化を持つ人々のそれぞれの住まいの日常を問うことになるはずである。それは内側の日常を問うことにはかならない。

3. 民俗学と日常史の〈住まい〉研究

〈住まう〉という営みは、普遍的な人類の要求のひとつである。住居は、雨風を凌ぎ、外敵を防ぎ、そこで子孫を産み育てるための安全を提供する基本的物質的設備である。また住居は、そこで食べ、飲み、コミュニケーションをとり、仕事をし、またくつろぐ、家族生活を営む社会的な場、生計の場でもある。そこで営まれるあらゆる営みが〈住まう〉という意味に含まれる。応用住居研究者のフラデー (Antje Flade) による〈住まう〉ことの定義「物理的、社会的、心理学的に横断的な行動を包含する人と環境との密接な関係であり、その関係を通して、人は日常生活を送り社会関係を組織だて、その関係を通して自らを位置づけ、自らの生活の意味を附託する、それが〈住まう〉ということである」[Flade 1987: 16] ([Harth & Scheller 2012: 7] の引用) と〈住まう〉ことを定義づけている。

この〈住まう〉ことの日常を捉えようとしてきたのが民俗学における住研究であり、また日常史であった。いわゆる農村部の農家 (Bauernhaus) での暮らしを、おもに物質的側面を重視し、〈住まい〉というよりは住居研究に取り組んできたのが民俗学であり、一方、19世紀の都市労働者の日常生活に関心を寄せる社会史、特に日常史の一派は、「労働者達はどのような住居のなかで、どのような日常を送ってきたか」を記述しようと試みてきた。

民俗学における農家研究を担ったのは、民俗地図の作成を担ったボン大学やミュンスター大学の研究者たちであったが、彼らの研究の特徴は、住居の建築的特徴、また家具調度などの住まいの物質的な側面であり、そうした物質文化の地理的分布、イノベーションセンター (技術革新の発祥地) の特定、住まい、家具の通時的変遷をたどることにあつた⁴。

一方、日常史の分野では、特に1980年代に労働者文化への関心の高まりから、労働者たちの生活世界に光をあてる試みは広くなされた。なかでもハンス・ユルゲン・トイテベルク (Hans Jürgen Teuteberg) は、民俗学による成果も取り込みながら、社会史では困難とされていた労働者階級の住文化の歴史記述を試みている。その際、トイテベルクは、住居というハードウェアだけではなく〈住まう〉ことをめぐる物質的、社会的、文化的連関を全体的に把握し、対象化するために、大きな概念的枠組みである〈社会的住構成〉を提示している [Teuteberg 1985:3] (図3)。

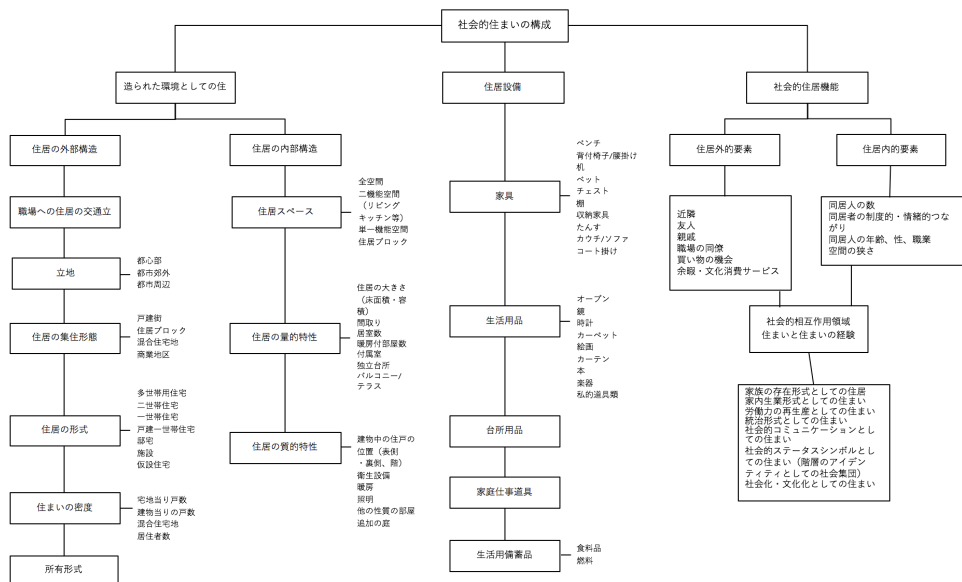


図3 トイテベルクによる「社会的住まいの構成」
[Teuteberg,H.J. 1985 : 3]

まず、社会的住まいの構成は、次のように大きく三つの側面に分けられる。1. 造られた環境としての住居、2. 住居設備、3. 社会的住居の機能である。さらに、「造られた環境としての住居」は、「住居の外部構造」と「住居の内部構造」に分けられる。「外部構造」として、「職場までの交通上の立地」、「住居の立地（都心部、郊外、都市近郊）」、「住居の集住形態（戸建街、住居ブロック、混合住宅地、商業地域）」、「住居形態（複数世帯住居、二世帯住居、一世帯住居、独立一戸建て、別荘、施設、緊急避難所）」、「住密度（宅地当りの住戸数、住戸当りの入居世帯数、入居者人数）」、「所有形式」があげられる。

これらの住まいの外的構造に対して、「住まいの内部構造」が考えられる。内部構造としては、「住居スペース（全機能スペース、二機能スペース〔ダイニングキッチン〕、単一機能スペース）」、「住居の量的特性（間取り、居住スペース数、暖房設備のある部屋、予備の部屋数、独立キッチン、バルコニー・テラス）」、「さらに「住居の質的特性（建物の中での住居の位置、衛生設備、暖房、照明、他の室内設備、庭）」があげられている。

社会的住まいの構成の二つめの側面が、「住宅設備」である。まず「家具一式（ベンチ・椅子・腰掛、机、ベッド、長もち、棚、タンス、カウチ・ソファ、洋服掛け）」、「家庭用具（オープン、鏡、時計、カーペット、絵画、カーテン、楽器、個人的な備品）」、「台所用具」、「家庭仕事用具」、「家庭用備蓄品（食料、燃料）」があげられている。

前二者が、住生活に関わる物質的側面であるとするれば、三つめの大きな側面は、社会的な住居機能である。

社会的住居機能は、さらに二つの要素に分けられる。住居の外的要素と住居の内的要素である。住居の外的要素には、近所・近隣、友人、親戚、職場の同僚、買い物の可能性、余暇・文化消

費サービスがあげられている。

住居の内的要素には、住人の数、住人の制度的かつ情緒的つながり、住人の年齢・性別・職業、住居の空間的余裕があげられている。

この外的、内的という二つの要素領域は、<住まい>と<住まいの経験>という社会的相互作用領域と結びついている。すなわち、家族の存在形式としての住まい、家庭内生業形式としての住まい、労働力の再生産としての住まい、消費の場としての住まい、社会的コミュニケーションの場としての住まい、社会的ステータスシンボルとしての住まい（社会的集団・階層のアイデンティティ確立）、社会化・文化としての住まいとなる。

このようなトイテベルクの図式は、<住まう>ことが単なる物質的条件に付帯した行為というだけでなく、住居という構造化された空間の中でのコミュニケーションや生活運営全般を包括的に捉える視点を提供している。<住まう>とは日常生活の多くの場面を覆っている生活領域といいいい。しかしながら、トイテベルクによるこの図式も、20世紀、特に戦後の<住まい>の文化の変化を捉えうる構図としては十分とはいえない。とりわけ本稿で問題とする戦後登場した新しい集合団地、技術的にも社会的にも本質的变化を経験した現代社会での<住まい>については、住宅・生活技術の高度化、さらには家族形態や住居の役割の変化等、さらなるファクターを組み込まなければならぬだろう。

4. ジルバーマンの『ドイツ人の住まい』

<住まい>に対する社会学の関心は、戦後の復興から<奇跡の成長>を遂げ始めたドイツにおいて、都市人口の急速な増加による解決策として、計画・建設された大規模集合住宅、団地での住生活に対する批判から生まれた [Teuteberg 1985:17]。ケルン大学のレネ・ケーニヒ (René König)、エリザベート・プファイル (Elisabeth Pfeil) らの社会学者が住まいについての経験的研究を強く進めたが、なかでも『ドイツ人の住まい』[1963] を著したアルフォンス・ジルバーマン (Alphons Silbermann) の研究はその後の<住まい>の経験的研究の嚆矢となった。

ジルバーマンの研究は、当時の西ドイツ第二次大戦中、壊滅的な打撃を受けたケルン市の都市部、ケルン市から東へ50kmほどに位置する人口1万人程度の小都市ベルクノイシュタット (Bergneustadt) において、1961年から1962年にかけて、EMNID 世論・社会研究所 (Institut für Meinungsforschung und Sozialforschung der EMNID) の委託調査によって行なわれたデータに基づいている。同調査は、ケルン、1088名、ベルクノイシュタット51名の無作為抽出した住民に対し、質問票・インタビューによる調査、さらに住宅雑誌、家具商品パンフレットの内容分析がなされた。この<住まい>の経験的社会研究が注目したのは、民俗学や建築史研究で重視されてきた家屋や内装・家具などの物質的側面そのものというより、物質文化に付帯した行動としての<住まう>ということであった。これは、日常史において、自伝や新聞記事、エッセイなどの資料によって手繰り寄せようとした住むことの日常を、生活者から直接に補足しようとするものであった。

ジルバーマンが<住むこと>ことの日常を分析するうえで、中核となる概念が<住まいの経験 (Wohnerlebnis)>である。<住まう>という多義的で包括的な人間行動を、個々人と集団の関

係に光を当てるという意味で、唯一の事実こそ、〈住まいの経験〉であるとする。「住まいの経験だけが作用圏を生み出すことができ、動的であり、社会的でありうる。住まいの経験だけが、意味のある契機となりえ、社会的事実として〈住まいの社会学〉の出発点となり中心点となりうる」[Silbermann 1963:15]。〈住まう〉ことを、住宅の外的条件や内装・家具などの物質的側面から記述・記録するだけでは、決して住まうことの日常に迫ることはできない。ジルバーマンがいうように、〈住まいの経験〉が「特定の空間での、社会・感情的領域であり、笑い、同意、否定、主張、対立などの社会・感情的状況を生み出す」[Silbermann 1963:15]のものであるならば、この経験の中で自から表出された心理的・社会的事実、またどういった要因がそうした経験に影響を及ぼすかを認識することが〈住まう〉ことの実質的な意味を明らかにすることになるはずである。

ジルバーマンが分析を加えた質問票は、まず回答者の基礎情報からはじまって、およそ 20 項目にわたる。そうした多岐にわたる質問事項によって抽出された〈住まいの経験〉に、七つの側面から分析を加えている。すなわち、1. 住居立地、2. 住まいの標準、3. リビングルーム家具の来歴、4. リビングルーム家具のモデル像、5. 親の住居と知り合いのリビングルームの比較、6. 余暇時間の住行動、7. 住文化、そしてこの住文化をさらに、a) 嗜好、b) 流行、c) 色調、d) 文化と個性、という要素によって分類している⁵。

いわゆる経験的社会研究の色彩の濃い、定量的データから描き出される 1960 年初頭のドイツの住まいとはどのようなものなのだろうか。

ジルバーマンの分析の特徴は、常に、〈内側〉と〈外側〉と名付けられた二つの視点からなされているということである。すなわち、内側の視点とは、「何によって住まいの経験は決定づけられるか」、そして外側の視点とは「何によって住まいの経験は社会的なものになるのか」を問う視点である。さらにこの二つの側面は互いに作用し合い、また相反することもある複合的なものである [Silbermann 1963:27]。

ジルバーマンが、まず住まいの経験として分析の対象としたのは「住まいの標準（スタンダード）」である。大都市、小都市の住民にとって標準的な〈住まい〉とはどういうものか、質問票、聞き取り調査によって、持ち家・賃貸の別、住戸面積、住戸形式、部屋数、部屋の機能、家具・家財の種類、世帯構成、社会階級、年齢構成などの統計的データによって明らかにしてゆく（表 1・2）。一人当たりの床面積など、家族構成や社会階級によって様々であることはもちろんだが、興味深いのは、インタビューによる調査対象世帯に対する評価データである。

例えば、ケルン、ベルクノイシュタットにおける自分の住居に対する現状評価についての評価データによれば、住居内の状態について、両都市とも、清潔さ、整理整頓など⁶ 80 パーセント以上が良好であるとの結果が出ている（表 3・4）。インタビューの価値判断を含んだ相対的データではあるが、掃除が行き届き、家具が秩序正しく配置されているリビングルームの情景は、当人の生育環境の中に織り込まれた体験でもありうるし、また軍隊生活での秩序だった営舎の体験と重なる場合があるかもしれない。逆に、清潔さが保たれ整理・整頓されているという住まいの状態は、内側の視点から言えば、住まいの経験を決定づける心理的要素であるということが出来る。さらにこのデータの背景には、調査当時、急速に普及した電気掃除機や冷蔵庫などの電化製品、サービスワゴンや収納家具などの住環境の技術的発展がある。こうした物質的技術発展も住まいの経験を規定する要素である [Silbermann 1963:28]。

一方で、住まいの経験を、外側から社会的に規定する要因も存在している。ジルバーマンによれば、それは建築家集団であるという。建築関連文献の中で、頻繁に現われる三つの主要な観点——共同体、家族と住居スペースの大きさ——、すなわち緊密な家族生活を送ることを配慮する建築家の、この三つの観点に基づいて設計された住居のあり方が、あらかじめ住まいの経験を規定しているのである [Silbermann 1963:29]。

表1 住居の形態 (%)

	ケルン	ベルクノイシュタット
邸宅 (Villa)	1	2
1～2世帯住宅	14	51
3～5世帯賃貸住宅	26	25
6～10世帯賃貸住宅	44	12
11世帯以上賃貸住宅	1	2
アパート	9	4
その他の住宅	2	2
農家	1	-
仮設住宅		

ケルン 1088名/ベルクノイシュタット 51名 [Silbermann 1963:159]

表2 住居の部屋数 (%)

	ケルン	ベルクノイシュタット
1	4	2
2	22	16
3	43	29
4	19	41
5	8	10
6～	4	2

ケルン 1088名/ベルクノイシュタット 51名 [Silbermann 1963:161]

表3 住居の清潔さ (%)

	ケルン	ベルクノイシュタット
清潔	87	88
不潔	11	12
未回答	2	-

ケルン 1088名/ベルクノイシュタット 51名 [Silbermann 1963:165]

表4 住居の整理整頓 (%)

	ケルン	ベルクノイシュタット
ゆきとどいている	75	88
ちらかっている	24	12
未回答	1	-

ケルン 1088名/ベルクノイシュタット 51名 [Silbermann 1963:166]

5. 住まいの経験の変容

ジルバーマンの〈住まいの経験〉からドイツ人の住生活を明らかにしようとする試みは、その後も継続してなされ、最初の調査からほぼ30年後1991年には『新しいドイツ人の住まい (Neues vom Wohnen der Deutschen)』、1993年には旧東ドイツを扱った『東ドイツにおける住まいの経験 (Das Wohnerlebnis in Ostdeutschland)』を発表している。さらに、ジルバーマンの研究を引き継ぎ、ハルトとシェラーは同様な視点・方法によって、定点観測的に、ジルバーマンの研究からほぼ20年を経たドイツ人の住まいのあり方を分析している（『ドイツの住まいの経験—20年後の反復研究 (Das Wohnerlebnis in Deutschland. Eine Wiederholungsstudie nach 20 Jahren)』2012）。

ほぼ60年にわたる継続的なこれらの研究において、ドイツ人の〈住まいの経験〉が、大きく変化していることが示されている。住宅不足がようやく改善され始めた60年代初頭と、その30年後の住まいの経験における顕著な変化の一つが、住宅やインテリア、家具などの選択について、経済的＝合理的な態度が顕著に見え始めたということである [Harth & Scheller 2012:17]。人々は家具、家財を求める際に、最も重視するのは価格であり、家具の質や美的な価値よりも、まず価格が優先基準となってきたという。さらに、住居内の公的な空間と私的な空間のバランスにおいて大きく様変わりをしたことも大きな変化だという [Harth & Scheller 2012:17]。住宅の中心を占めていたリビングルームは、家族の構成員が集う場であると同時に、客人を迎え入れ、その家の文化を表象するなかば公共的空間でもあるが、60年代初頭においては、いわゆる〈良きシュテューベ (Stube)〉⁷であるべき空間であったリビングが、外部の世界に表象するための空間というよりも、居住者がくつろぎ、趣味生活を送るためのより私的な空間へと変貌してきたことが⁸、80年代末の住まいの現実であった [Harth & Scheller 2012:17] インテリアの選択が、それまでの市民的伝統と結びついた趣味の良さ、あるいは伝統的農家のステューベ (居間) のそれではなく、個人の趣味嗜好を反映する個性的空間を演出するものとなってきたのである。

さらにその20年後、ハルト、シェラーの継続研究では、さらなる住まいの経験の変容が明瞭になっている。ドイツ社会の変化に伴った住環境の変化として顕著な傾向は、多元化 (Pluralisierung)、個人化 (Individualisierung)、審美化 (Ästhetisierung)、公共的空間と私的空間の越境関係であるという [Harth & Scheller 2012:164-165]。

これらの住まいの経験の変化は、ドイツ社会そのものの変化に対応しているのであるが、80年代末のジルバーマンの認識においては、世帯 (家庭) の在り方が、建築形式によって規定されると見ていたのに対して、ハルト、シェラーの分析では、21世紀の社会的・文化的に多様化したドイツ社会においては、むしろ住居や世帯の配分の変化が、世帯の生活の在り方を規定しているという [Hart & Scheller 2012:165]。例えば〈3部屋＋キッチン＋バスルーム〉という間取りの標準的住居は、90年代初頭までは、家族向けの典型的住居形式であったものが、現在では、シングル、一人親家庭、移民の大家族、またリフォームされた高齢者向けのシェアハウス (WG)⁹として使用されているケースも少なくない。つまり、夫婦に子供2人という標準的な家庭向けに設計された住居の住まい方は、多様な入居者が、自らのライフスタイルに合わせて住みついているのである。

また社会の多様性は、かつてジルバーマンが指摘したように「古き良きモデル」は存在せず、

住居は個人によって多様に〈住まれ〉、さらには世帯内でも、個々の家族の構成メンバーによってそれぞれの個室の中で、そのスタイルや住行動はより個人化（個別化）が進んでいるのである。

多様化、個別化は、伝統的規範に従った〈良き〉住まいというよりは、より美しい生活を求めて更に細分化していくと同時に、物質的価値の誇示というより、象徴的・文化的な差別化へと向かっている [Harth & Scheller 2012:165]。民俗学者のヴィルトフォイアー（Bianca Wildfeuer）は、ジルバーマンが分析の俎上に載せた住文化における様式、嗜好ともいえる〈ロマンティック〉という概念によって、住まいの日常を差別化する一群の傾向を持つ人々について詳細な分析を試みている。そこで示されたのは、ロマンティックの解釈は一律ではないものの、美的な価値観によって生活空間を構成してゆこうとする人々の姿であった。しかし彼等彼女等の私的空間はステータスを誇示したり、あるいはメディアやインテリアメーカーが提示する理想の住まいの再現ではなく、あくまでも自らの住まいの日常を自ら構築していく——たとえ〈ロマンティック〉概念が歴史的に形成された伝統概念であるにしろ——私的領域での生活行為なのである [Wildfeuer 2012]。

ハルト、シェーラーは、住まうという行動に関心を寄せるのが社会学的住まい研究だとすれば、文化学的研究では、特定の住居、内装が社会的理想像の表現ないしは帰結として、いかなる意味を持っているかが問われる、と指摘している [Harth & Scheller 2012: 7]。ヴィルトフォイアーは、ロマンティック概念から住まいの在り方を問うたが、従来のドイツ民俗学における住まいの日常の研究は、住まいの理想像がいかに表現されているか、さらにその理想像はどこから来たものかに関心を向ける。その意味で、戦後の住文化の変遷を通時的に捉えたトレンクレの研究では、住まいのモデルが、家族形態の変化や伝統を参照する以上に、外部からの情報——マスメディアや住宅・インテリア産業、家電産業が発する情報——に関わっていることを明らかにしている [Tränkle 1999]。

ジルバーマンの考察に見られるように、1960年代初頭のドイツは、経済成長の最中で、都市部に集中する人びとは、純然と〈住む〉ことに対する欲求が色濃く表れていた。いかに良く住まうか、その課題に対して建築家、都市計画家、住宅行政その他もろもろのエキスパートが、より現代的な暮らしの在り方を模索し、都市・住宅を設計していった。その中で登場したのが大規模集合住宅団地である¹⁰。

個々の住宅環境は、床面積の増大、部屋数の増加、インテリアの選択肢の多様化、住宅設備の技術的發展等に支えられ確実に向上してきた。その意味では、新たな住まいの日常でより顕在化したのは、トイテベルクの図式の中にも挙げられていた、住居の表象的側面、また住民の視線から見れば、自らの住まいを、自らの世界観に合わせてどう表現していくか、そして究極的には、いかに居心地のよい空間にしてゆくかという段階に入ったといえるだろう¹¹。

むすび——住まい研究とコミュニティ研究をつなぐ

ところがハルト、シェーラーの研究には、トイテベルクの図式でいう内的住居構造、つまり住居の内側の日常に焦点を当てているため、団地という問題系は現われてこない。

おのおのが住まいの内側をいかに個性化し、カスタム化したとしても、人はその住まいを自ら捨てていくこともある。先述のヴァインガルテンは、その造成直後から様々な理由で転出していく者も少なかった¹²。これは住まいを取り巻く環境、つまり地域社会の中での日常生活の在り方が大きく影響している。ヴァインガルテンで言えば、高層住宅団地でこれまで問題とされてきた、近隣とのコミュニケーションの欠如、余暇サービス施設、文化サービスの不足、なによりも住民の社会的・文化的多様性等がその理由となっていた。

しかしながら、高層住宅団地そのものがドイツ社会においてかならずしも常にマイナスのイメージがつきまとっているわけではない¹³。フライブルクでやはりヴァインガルテンと同時期に造成された集合団地であるラントヴァッサー地区やピショッフスリンデ地区などについてはネガティブに語られることはまれである。また1995年に、ヴァインガルテンの東に隣接した地区に最後の大型団地といわれるリーゼルフェルト（Rieselfeld）が生まれたが、ヴァインガルテンの教訓も汲んで計画されたこの大規模団地はむしろイメージはいい¹⁴。

ところで、2012年、ヴァインガルテンの象徴的な存在であった22階建最高層住居棟のリフォームが行なわれた。先にフォーラム・ヴァインガルテンが仲介し建築家と住民との対話による改修工事は、住民の光熱費の縮減に貢献するパッシブハウス化による省エネルギー住宅へ、さらには明らかに世帯構成員が減った高齢者向け床面積の縮小、部屋数の縮減等のコンパクト化が図られ、その結果入居戸数も増加した。つまり、住民、コミュニティの在り方に即して住居形態を変える試みがなされたのである [Badische Zeitung.de 2008年8月11日]¹⁵。

従来、民俗学においてもコミュニティ研究（ムラ研究）と住まいの文化の研究は別個の研究領域として進められてきた。しかし、住まいという私的領域の内側の日常世界と、コミュニティという公的で住宅の外側の日常世界は常に交叉し、相互の日常生活を規定し合っている。高層住宅団地というトポスは、まさに現代のこの二つの日常が交叉する場として分析されなければならないだろう¹⁶。

注

- 1 ヴァインガルテンのショッピングセンター（Einkaufszentrum）は1974年にオープンした。1998年当時、低価格が売りのスーパーとやや高価格のスーパーが並んで入居していた。明らかに二つのスーパーを利用する客層は異なっていた。
- 2 社会住宅（Soziale Wohnung）は、第二次大戦後、より広い社会層に住居を供給するために自治体によって住宅政策の一環として建設が進められた。
- 3 ヴァインガルテンの西地区は、2006年、フライブルク市より社会都市（Soziale Stadt）プログラムに指定され、リフォームに対する助成が行なわれた。[<http://www.freiburg.de/pb/Lde/344685.html>]（2016.2.18 アクセス）
- 4 例 えば、Wiegmann, G. (Hg.) Wandel der Alltagskultur. Aufgaben und neue Ansätze. Münster, 1977, Mohemann, G. Wohnkultur städtischer und ländlicher Sozialgruppen im 19. Jahrhundert: Das Herzogtum Braunschweig als Beispiel. In: Teuteberg 1985. 87-144. 等。
- 5 民俗学、文化人類学において〈住まうこと〉の全体を住文化として捉えるが、ジルバーマン等、ドイツの社会学的研究の特徴として文化をある種の表現形式を持つものとして、社会概念と区別する傾向があるようにみえる。
- 6 アンケートの質問項目そのものに、ドイツ社会特有と思われる「住まい」に対する意識が反映されている点は興味深い。

- 7 ステューベ (Stube) は、いわゆるリビングルームに相当するドイツ語の *Wohnzimmer* より伝統的な響きのある部屋の名称である。特に農村社会におけるステューベは、暖房のある (炊事場と共通のオープンによって暖房される)、住人が集い、家仕事などに携わる多機能の部屋であった。例えば糸紡ぎ部屋 (Spinnstube) などを連想させる言葉である。
- 8 王が指摘したように、そもそも住生活は私的な日常領域に属しているが、その傾向が強まれば強まる程、研究者がその場で立ち入ることは困難になるというジレンマが生じる [王 2014 : 76]。
- 9 WG は *Wohngemeinschaft* であるが、1960 年代の学生運動の中で現われてきた居住形式で、本来の家族向け住居、あるいはマンションを複数人で借り受け、現在でいうシェアハウスに近い。
- 10 ドイツ民俗学史上、こうした戦後誕生した移住団地をフィールドにしたのが、パウジンガー等、テュービンゲン大学のプロジェクト『新しい移住団地 (Neuesiedlung)』であった。主として引揚業者 < 故郷を追われた人々 > の受け入れ先として造成されたこれらの団地の研究は、ドイツ民俗学の対象領域としては住まい研究というよりは、村落研究・コミュニティ研究として捉えられている [Hugger 1989:219]。
- 11 どういう状態が心地よいのか、またどういう住まいのどの場所で、何をすると心地よいのか、という問いに対する回答は個人で違いがあるのはもちろんだが、日常的な住行動を決定する極めて重要な心理的要因であると同時に文化的要因でもある。シュミット・ラウバー (Schmidt-Lauber) は、住居も含めた、心地よさ (Gemütlichkeit) を文化的次元で捉える試みを行なっている [Schmidt-Lauber 2003]。
- 12 入居開始当初の 2 年間で、賃貸住宅の家賃の高騰もあって 150 人が転出した [Scherfling 1994:61]。1972 年の住民の意識調査でもヴァインガルテンの東地区の住民の 43.7% ができれば転居したいと思っていたという [Huber-Sheik 1996 : 31]。
- 13 この点では、韓国の 1960 年代の造成当初からの批判的にもかかわらず、徐々に選好されていった過程と [南 2014:57-58]、ドイツにおけるその過程には違いがあるようである。確かに戦後ドイツにおいて、旧東独で機能性・コストを重視して造成されたパネル工法による集合住宅団地やゲッター化する社会住宅に対する批判的な見方が有力であったが [Richter 2008 : 54]、こうした見方が住居を求める消費者の志向に及ぼす影響を及ぼしているかはさらに検討を要するだろう。
- 14 リーゼルフェルトでは、各居住棟は 5 階以下の低層とし、省エネルギー住宅工法、いわゆるパッシブハウスが導入されているなど計画時より、現代ドイツの理想像の一つであるエコイメージが付加されていた。
- 15 このリフォームのプロセスは、市のホームページ上で、動画で紹介されている。 [<http://www.badische-zeitung.de/freiburg/hochhaus-wird-im-passivhaus-standard-saniert-4198129.html>] (2016.2.18 アクセス)。
- 16 ミュラーによる『グリンデル高層住宅: 団地暮らしの映像民族誌的接近』(日本語版 DVD、東京大学総合文化研究科) では、住民に対するリビングでのインタビューを中心に、団地コミュニティ全体の映像民族誌が試みられているが、このようなアプローチにも住居研究とコミュニティ研究を橋渡しする方法論が示唆されている。

参考文献

- 岩本通弥 2014 「“当たり前”と“生活疑問”と“日常”」『日常と文化』1。
- 南根祐 2014 「ソウル高層住宅の展開とアパートの暮し」(中村和代訳)『日常と文化』1。
- パウジンガー、ヘルマン / ブラウン、マルクス / シューヴェート、ヘルベルト 1991~3 「新しい移住団地・東ヨーロッパからのドイツ人引揚民等の西ドイツ社会への定着にかんするルートヴィヒ・ウーラント研究所による民俗学・社会学調査 (1)~(4)」(河野真訳・解説)『愛知大学国際問題研究所紀要』94、96、98、99 号
- ミュラー、マイケ 2013 『グリンデル高層住宅: 団地暮らしの映像民族誌的接近』日本語版 DVD、東京大学総合文

化研究科)

- 王傑文 2014「北京市高層集合住宅の高層集合住宅の暮らしと生活世界の変容」『日常と文化』 1 : 67-78.
- Amt für Bürgerservice und Informationsverarbeitung der Stadt Freiburg im Breisgau(Hg.). 2014 Beiträge zur Statistik der Stadt Freiburg. Statistisches Jahrbuch 2014. (https://www.freiburg.de/pb/site/Freiburg/get/776613/statistik_veroeffentlichungen_Jahrbuch_2014-NIEDRIG.pdf#search='statistisches+Jahrbuch+2014+freiburg+im+breisgau' 2016.2.18 アクセス)
- Baumhauer, Joachim Friedrich. 1988. Hausforschung. In: Brednich, R.W. Grundriss der Volkskunde. Dieter Reimer, 95-116.
- Bürgerverein Freiburg-Weingarten e.V.(Hrsg.). 1997. 25 Jahre Bürgerverein in Weingarten. 30 Jahre Stadtteil. Flagge, Ingeborg(Hrsg.)Geschichte des Wohnens. Bd.5.1945 bis heute: Aufbau,Neubau, Umbau. Deutsche Verlags-Anstalt.
- Forum Weingarten. 2015. Sozial Situation und Entwicklung in Weingarten. eine Einschätzung.(<http://forum-weingarten.de/images/pdf/Soziale-Situation-in-Weingarten.pdf> 2016.2.18 アクセス)
- Gießer, Anne. 2001.Was war los in Freiburg 1950-2000. Alan Sutton.
- Harth, Annette & Gitta Scheller. 2012.Das Wohnerlebnis in Deutschland. Eine Wiederholungsstudie nach 20 Jahren. Springer.
- Huber-Sheik, Kartin. 1996. Sozialer Brennpunkt : Sozialstruktur und Sanierung in Freiburger Stadtteil. Hartung-Gorre.
- Hugger, Paul. 1988. Volkskundliche Gemeinde- und Stadtteilmforschung. In: Brednich, R.W. Grundriss der Volkskunde. Dieter-Reimer,215-234.
- Mohrmann, Ruth-E. 1988. Wohnen und Wirtschaften. In: Brednich, R.W. Grundriss der Volkskunde. Dietrich-Reiner, 117-136.
- Richter, Peter. 2008. Deutsches Haus. Goldmann.
- Scherfling, Karlheinz. 1994. Freiburg aus der Luft. Unterwegs im Stadtteil.Badische Zeitung.
- Schildt, Axel & Arnord Sywottek(Hrgs.). 1988. Massenwohnung und Eigenheim.Campus.
- Schmidt-Lauber, Brigitta 2003. Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung. Campus.
- Silbermann, Alphons 1963 Vom Wohnen der Deutschen. Westdeutscher Verlag.
- Teuteberg, Hans Jürgen (Hrsg.).1985. Homo habitans. Zur Sozialgeschichte des ländlichen und städtischen Wohnens in der Neuzeit. F. Copenrath.
- Teuteberg, Hans Jürgen.1985. Brtrachtungen zu einer Geschichte des Wohnen.In: Teuteberg, H. J. Homo habitans.F. Copenrath,
- Teuteberg, Hans J., C.Wischermann. 1985. Wohnalltag in Deutschland 1850-1914. F.Copenrath.
- Tränkle, Margret.1999. Neue Wohnhorizonte. Wohnalltag und Haushalt seit 1945 in der Bundesrepublik. In: Flagge, I.(Hrsg.) Geschichte des Wohnens. Bd.5.Deutsch Verlag-Anstalt:687-806.
- Uhlendahl, Thomas(Hrgs.)2014. Das Image von Freiburg-Weingarten: Innen- und Außensicht des Stadtteils im Kontext des Programms ‚Soziale Stadt‘ Abschlussbericht. Institut für Umweltsozialwissenschaften und Geographie Fakultät für Umwelt und Natürliche Ressourcen Albert-Ludwigs-Universität Freiburg im Br.
- Wildfeuer, Bianca. 2012. Romantisches. Zut Bedeutung einer Gefühlswertigkeit am Beispiel heutiger Wohnkultur. Waxmann.